無底と意志
——J・ベーメの意志-形而志学の輪郭——

薗田　坦

序

ヤーコブ・ベーメは、通常、いわゆるドイツ神秘主義の掉尾を飾る体系的思想家と見られるとともに、またルネサンス期におけるドイツ自然哲学思想の大成者とも見られている。これらの両面は、無論ベーメ自身においては不可分に結びつき、内的に連関し合っており、そこに神秘思想あるいは自然哲学としてきわめて独自な、のみならずのちのドイツ哲学への先駆という意味でも重要な、彼の思想が成立している。

その独自な思想形成の原点ないし根本動因として、ベーメがすでに若くして、善と悪、愛と憎しみ、罪とその救いといった対立的な事実に対して鋭い感覚と深刻な反省をもったことは、よく知られているところである。より一般化して言えば、彼にとっての根本問題は、現実世界と人間存在における根本的な二元的対立・葛藤の事実と、それらの根源への徹底した探索とそれに基づく克服ということであった。この事実を象徴的に示すのが、周知の、光と闇についての彼の決定的な神秘体験であるとすれば[1]、そこからその源泉に遡って、その対立の克服と絶対的な自由を求めたのが、彼の独自な思想の営みであったと言えよう。

ベーメにおいても、悪や罪の事実から発して二元的対立の源泉を探る思弁は、当然のことながら一切の根源である神へと向けられる。しかもその際、彼の思弁はいわゆる弁神論的な発想にとどまらず、むしろドイツ神秘主義の伝統に従って、いわゆる神をも越え、いわば神自身の根底にまで遡源し、その起源を探索せんとする。それは被造的万物のみならず、神自身すらもがそこから起源する、一切の根源・根底にまで遡ることである。そこはもはや神とも言われず、ただ無と言うほかはなく、しかも一切の源泉・根底でありつつ、それ自身もはやいかなる根底をももたない。ベーメの「無底」という独特な概念は、この事態を表現しようとするものであった。

「無底」がこのように無にして、しかも一切の根源・原底であるとすれば、逆にまた神のみならず、一切の多様と対立もここからの生成・発現として捉えられねばならない。根底への遡源の問いは、そこから必然的に、生成と発現への問いをもたらす。とりわけ彼にとって重要な悪や罪という問題も、ここから根拠づけられ、把握されねばならないことになる。端的に言って、ベーメにおいてこの生成・発現は「意志」として捉えられる。ここから彼において、神と世界を含む形而上学的思想の全体が「意志」を通じて、根本的に意志的性格のものとして構築されることになる。

ベーメの形而上学的な思想体系は、このような「無底」と「意志」という二つの根本概念の連関のなかから構築され、その全体が意志-形而上学(Willens-metaphysik)という独自な性格を帯びて成立する[2]。無底からの意志的発現のゆえに、その形而上学的体系は、いわばそのうちにTheogonieとKosmogonieを不可分な仕方で含み、無底から世界創造へのあいだにはきわめて動的な関係が張り渡される。以下ここでは、このような無底から世界創造にいたる動的プロセスを四つの局面(Phase)において捉え、ベーメの意志-形而上学と言われるものの輪郭を描き出すように試みてみたい。それらは、ベーメにおける悪と自由の問題への、準備的考察という意味をもちうるであろう。

I

ベーメの意志-形而上学の展開における第一の局面ないし場面は、無底からの意志的なものの原初的な発現として見られる。上述のように、無底は神自身すらの根底であり、もはや神とも言われず、ただ無と言うほかはないが、しかもそれは神と、それに由来する全自然との源泉であり、原底である。無底は無であるにもかかわらず、一切はこの無底から発現する。逆にまた、それが無であるがゆえに、一切は意志的なものと見られねばならない。神もまたこの無底からの発現として、それ自体が無底的な意志として見られることになる。この無底からの神の意志的発現の原初的事態は、例えば次のように語り出されている。

「無底(Ungrund)は、永遠の無である。だがそれは、一つの欲動(Sucht)として永遠の始源をなす。実際、その無は、あるものを求める欲動なのである。しかもそこには、ものを与えるような何かがあるのではなく、むしろその欲動は、ただ渇望する欲動として、それ自体そのまま・・・また無でもあって、ただの意志としてのみある」

(*Pans.* Ⅰ-1)[3]。

無底は、それ自体としては永遠の無と言うほかはない。しかしそれは、一切の（神自身すらの）底なき根底である以上、永遠の始源でもある。無底は無であるが、と言うよりもまさに無であるがゆえに、一切の動性の原底、しかも無底的原底でなければならない。そしてそこに現われる最初の発現を、ベーメは「欲動」として捉える。欲動とは、この底なき深みより生ずる原初の欲そのものの動きである。欲=動は、ただ渇望する欲動であって、そこにはひたすらに、あるいはただやみくもに求めるという渇望のみがある。それはまた、欲の激しい昂揚、熱狂をも示す[4]。渇望の求めは、自らのうちでひたすらに高まり、自らのうちへと引き寄せ、自らのうちに凝り固まる。渇望がこのように自らのうちで昂揚し、自らのうちに凝縮するとき、その渇望の求め自身がより明確化し、自覚的となり、そこにより具体的な意志を生み出してくる。このような「意志」の出現を、ベーメは続いて次のように語る。

「このようにして、今や欲動は無のうちにあるがゆえに、それはそれ自身に、あるものへの意志を生み出す。そしてこの意志は、思考として一つの霊(Geist)である。意志は欲動から生じ、その欲動における欲動する当のものである。というのも、それは自らの母を欲動として見出すからである。・・・このように、意志は自らの母を見出したので、今やそれは自らのありかをもつのである」(*Pans.* Ⅱ-1)。

欲動はそれ自体として無であったが、その動性は自らのうちに昂じ、自らの内へ引き篭もり、凝り固まることにおいて、自らをいわば外へと現わし出し、より明確な意志へと具現化する。ただ盲目的に内へと求めることから、次第に外へと求める、つまり何か外なるものに向かう志向的な働きがそこに顕わになってくる。ベーメの言葉では、「あるものを求める欲動(Sucht nach Etwas)」は、「あるものへの意志(Wille zu Etwas)」となるのである。このnachとzuとの使い分けのうちに、欲望における勢位化(Potenzierung)が微妙に捉えられていることが見て取られよう。

意志は、このようにして欲動から生じ、始めて意志としての明確な形を取ってくる。とは言えそれは、まず欲動があって、ついでそこから意志が生ずるというように見られるべきではない。むしろ意志は、あるものへの意志として自らを明確化することにおいて、始めて自らが欲動から生じてきたことを知り、その意味で始めて欲動を自らの母として、つまり自らがそこから生じてきた根底として見出すのである。意志はそこで、自らがその欲動の、欲動する当のもの(Sucher der Sucht)であることを自覚する。欲動もま

た、この意志の自覚と結びついて、意志自身のもととして見出され、また存立する。意志が自らを意志として知る知と、欲動を自らの根底として見出す知とは、意志自身の一つの自覚内容をなしている。このことによってまた、「そこで自らを見出す場をもたない」(*Pans.* Ⅰ-1)とされた欲動に対して、意志はここで「自らのありか」をもつと言われることになるのである。

意志はまた、このような知ないし自覚をもつことにおいて、一つの霊(Geist)[5]、あるいは意志=霊(Willen=Geist)と呼ばれることになる(*Pans.* Ⅲ-3)。霊とはここで、さしあたって思考と言われていたように、何らかの知的性格をもつものを意味している。ここでベーメは欲動と意志の区別をはっきりと語る。「意志は一つの霊であり、それは渇望する欲動とは別のものであることが理解される。・・・欲動は意志の原因であるが、ただし認識も理知ももたない」(*Pans.* Ⅱ-2)、と。欲動においては、未だいかなる知もなく、いわば何を求めるかというその対象すらも知らない。その意味でそれはまさに盲目的な、やみくもな欲動であった。それに対して、意志は今や理知あるいは悟性(Verstand)を帯びたものである。言いかえれば、欲動はこのような理知あるいは自覚を備えることにおいて、自らを意志として明確化し、具体的な意志（あるものへの意志）として現われる。ベーメにおいて、意志は明確に意志となるとき、本性的に知的性格をもったものとして見られるのである。

意志はさらに、この理知によって、欲動を自らの母（原因）として見出し、また「自らのうちで本質をなすもの」(*Pans.* Ⅱ-2)として知る。そしてその限りで、意志は自分を産む欲動を支配し、「その母のうちで支配する者(Herr)である」(ebd.)。ここにも欲動と意志の独特な関係が示されている。意志は、欲動を自らの原因ないし本源として知り、その限りでは欲動に対して支配する者、つまり主(Herr)たる関係に立つ。しかし意志は、まさにそこから自らが生じてきた本源ないし本質を欲動のうちに知るのである。意志の本質をなすものは、あくまでも欲動であり、意志の意志的生命は、まさに欲動の動的生命に由来している。その限り意志は欲動に対して、いわば従であると言うこともできる。しかしまた、意志は欲動からの躍動する生命に貫かれ、その母なる生命に生かされている限り、両者を貫く意志的生命は一つであるとも言えよう。

ベーメにおける欲動と意志の関係は、以上のように無底からの原初的な意志的発動のダイナミズムを示している。欲動は意志の生命的本質をなし、意志はその欲動を自らの根底としつつ、欲動を理知的に支配し、意志として発現する。両者はいわば相互に転入

し合い、根本的に一つの事態であって、それゆえ「いずれがより先でもなく、両者はともに始まりをもたず、またつねに一方が他方の原因となり、そこには永遠の紐帯がある」(*Pans*. Ⅲ-3)とも言われる。そしてその全体は一つの意志であり、しかもその全体が無底から生ずるのであるゆえに、ベーメはこれを「無底的意志」(*Grat*. Ⅰ-4)[6]とも呼んでいる。

ベーメはしかしこの動的な事態を把握し説明するために、これを意志と欲動とにいったん区別し、その両者の相関関係として示した。そして彼は、この意志あるいは意志=霊を「神」と呼び、欲動の生命を「（神の）自然」とも呼ぶ(*Pans*. Ⅲ-3)。それらの特質は、「それゆえまた意志=霊は無底の永遠なる知であり、欲動の生命は意志の永遠なる本質である」(*Pans*. Ⅲ-4)とも特徴づけられる。あるいはまた、これらがともに生命と見られる場合には、「霊=生命」と「自然=生命」とも呼んでいる(*Pans*. Ⅳ-8, Ⅴ-1)。いずれにせよ、これらは一つの根源的な事態における二つの原理であり、これによって神的顕現の内的構造とその動性が示されていると言えよう。以上が神的な意志、つまり意志としての神の顕現における第一の局面(Phase)の概要である。

Ⅱ

無底からの発現として、「神的な意志」あるいは端的に「意志としての神」の最初の顕現が見られた。繰り返すまでもないが、それは欲動と意志との相互的な動的関係を含みつつ、しかもその全体が無底から発現する一つの生命によって貫かれた、一つの無底的な意志である。ここには今や、意志というあり方が明確に現われ出てきている。

意志がより明確な仕方で現われ出てきたということは、先にも言ったように、それが（欲動であるにとどまらず）、「あるものへの意志」となり、その志向的なあり方をより明確化するということであり、同時にまた、それが意志として自覚的になることとも結びついている。このことは言いかえれば、意志自体が何らかの意味で知的側面をもつことに他ならない。上述のように、意志がそのまま霊となること、あるいは意志=霊として、理知を帯びたものと見られることである。意志は何かを意志することにおいて、自己自身を知り（自覚し）、そのことにおいて自己を現わす（形成する）。何かを欲することを通じて自己を現わし出すというところに、意志の本質的なあり方がある。意志の本性は自己の顕現ないし発動にあり、ここでの神的意志もまたそのような本性をもつ。ベーメはこの意志を「第一の意志」とも呼ぶが、それはここで始めて明確な仕方で意志

となったことを意味するとともに、その意志のさらなる顕示によって「第二の意志」が生ずることを予示し、そのものに対してまさに第一なのである(*Grat.* Ⅰ-5)。

ここから、神的な意志における第二の局面が開かれてくる。それは意志としての神における、神的意志自体の自己展開ないし自己形成がなされる場面である。ベーメの思弁において、そこに彼独自な神生成論(Theogonie)が展開されることになるが、しかも当然のことながら、それは伝統的キリスト教的な神的三一論と重ね合わせて見られてくる。しかしまたその神におけるgeneratioは、あくまでも意志によるそれであって、その動性の原理は第一の局面において見られたのと同様の、意志的なものの独特のDynamikに基づくものである。この第二の局面についても少し内容的に見ておこう。

さて、神的意志の発動・顕現は、今やその意志的本性に従って、何ものかを求め、捉えんとする。しかしながら勿論、ここにはいまだ神的意志以外の何かがあるわけではない。それゆえ神的意志の発動は、その意志が自己を捉え、そのことによって自らを知り、見ることである。逆に言えば、神的な意志はここで、自己を知るという仕方で自己を捉え、逆にまた自己を捉えんとして自己を見ることにおいて、いわば自己を二重化し、自己を現わし出す。意志的なものは、知的なものを媒介として、それ自身を顕現する。ベーメの言葉では、自己の把捉(fassen)は、自己自身の産出(gebären)として考えられる。神的意志は、ここでも自己の内へと捉えることにおいて、自己をいわば外へと産み出し、現わし出すのである。

このような事態を言い表わすベーメ独特のきわめて具象的な表現を挙げておこう。例えば彼はこの事態を、意志が霊によって自ら懐胎する(sich schwängern)とか、孕んでいる(schwanger sein)と表現し、その産出は意志自体のうちで生じ、それ自身のうちにとどまる、と語る(*Pans.* Ⅳ-3,4)。ここで意志の産出のうちに、すでに必然的に産むものと産まれるもの（つまり父と子）という契機が生じているが、同時にその産出があくまでも意志のうちで生じ、意志自らがその保有者(Behalter)であることが強調されている(*Pans.* Ⅳ-4)。

さらに別のテクストでは、やはり同じ事態を表わす形象としてベーメが好んで挙げる、一つの眼(Auge)あるいは鏡(Spiegel)という譬喩が見られる(*Sex punc.* Ⅰ-8,9)[7]。ここにいう眼あるいは鏡は、その本質的生命である見ること（映すこと）が、その見ること自体のうちにあり(ebd.)、しかもその見ることのうちに何ものをももち込まない(ibid. Ⅰ-8)、と語られる。今これらについて詳述することはできないが、要するに先の意志のあり方が、

その見る（映す）働きがそれ自身のうちで、しかもそれ自身のうちから、その見られるもの（映されるもの）を生み出し、そのことを通じて自らを見る（映す）という、そのような永遠なる眼ないし鏡によって、形象的・譬喩的に表わされていると言うことができよう。そしてそこから次のように語られる。

「われわれはここに、無底的な知恵をそなえた、神的三性の永遠なる本質を理解する。永遠なる意志は眼ないし鏡を捉え、その眼（鏡）のなかで永遠の見ることがこの意志の知恵としてあるが、この永遠なる意志は、父である。そしてこの知恵のうちで永遠に捉えられたものは、子あるいは核心であって、そこにおいてこの把捉は、それ自身のうちに根底あるいは中心を、無底から根底へと捉える。というのも、この捉えられたものは、生命の言葉あるいはその本質性であり、意志はそのなかに光輝とともに現われるからである」(*Sex punc*. Ⅰ-15)。

すでに明らかなように、ベーメはここで上に見てきた神的意志のあり方を、そのままキリスト教的な神の三一論といわば重ね合わせて理解するわけである。意志はここで自らを見、自己を捉えることによって、自らのうちに新たな意志を産む。第一の意志は、ここで別の、第二の意志を産むのである。しかもベーメはこの第二の意志を、意志自身の核心(Herz)あるいは中心(Centrum)とみなし、さらに無底的な意志がここで始めてその根底(Grund)をもつと考える。しかもこのような第一の意志と第二の意志の関係は、神における、いわゆる父と子との関係としても見られるのである。意志としての神において、その父なる神は、その子（を産むこと）において始めて、その神としてのHerzを、いわばその核となる中心を明確な形でもつ。意志自体は無底に起源し、いわば底なしという本性をもっていたが、今やその子において、またその子を産むという仕方で、始めてその意志としての存立の根底あるいは基底を構えるのである。父はその子において、その子をもつことにおいて、始めてその存立を明確にし、確定するとも見られよう。こうした理解は、通常の三一論からすれば、恐らくかなり独特なものと言わねばならないであろう。

なお、こうした神における子は、ベーメにおいてまた言葉(Wort)とも呼ばれるが、これも伝統的な「神の言 (Verbum Dei)」という理解に立脚することは言うまでもない。しかもベーメは、この神の子としての言葉に格別の重要性を見出している。例えば彼は「言葉はその（永遠なる霊の）中心、あるいはその座(Sitz)であり、また一つの核心として中央にある。言葉の霊は、永遠なる第一の意志に本源(urständen)し、それは本質的生

命の不思議を開示する」(*Pans.* Ⅳ-8)とも言う。このような「言葉」のもつ内実と意義については、のちに第三の局面に関連してより詳しく取り上げるであろう。

さて、先に引用した父からの子の産出、あるいは無底から根底への把捉についての箇所に続いて、ベーメはさらに霊について語る。無論、ここで語られる霊が、いわゆる神的三一論における聖霊を意味していることは明らかである。しかしベーメにおけるその特質や意義は必ずしも分かりやすくはない。例えば彼は、

「それ（霊）は、何もないところでつねに見出すFinder（見出す者）である。このものは、根底の中心から再び外発して、意志のうちで探索する。そのとき、眼の鏡は、父と子の知恵として顕わになる」(*Sex punc.* Ⅰ-16)

と言う。恐らく先の二つの意志をまさに父と子として見出し、両者を一つの生命に結ばれたものとして見るのが、霊（聖霊）の働きであろう。霊は、両者を父と子の関係として見出し、自らに顕わにする（つまり自覚する）がゆえに、まさに「見出す者」と呼ばれ、またその意味で霊なのであろう。霊は、根底（子）からもう一度外に出て、意志を探り、そしてその（父と子としての）内実を見出し、顕わし出す。その限りで霊は、父と子を繋ぐ生命的紐帯であると言うこともできよう。

神的な意志の自己展開は、ベーメにおいて、以上のように神的三一論に対応して捉えられている。しかしそこには独自な神生成論が見られ、しかもそれはあくまでも意志を通じての生成であり、関係である。このことが第二の局面の根本的特質である。

Ⅲ

上述のように、ベーメの意志-形而上学の第二の局面において、「神的な意志」ないし「意志としての神」は、いわば意志としての自己内展開を成就した。神はここで自らの根底を確保し、また神としての自己性(Selbheit)を確立すると見られる(*Grat.* Ⅰ-12)。このことはまた、先に意志が意志=霊として見られた関連から言えば、今や霊が明確な仕方で永遠なる（神的な）霊として現われたことでもある。ベーメにおいて、霊の本質は見ること(das Sehen)にあるが、今や霊は自己を見ることにおいて自己を生み、しかもその見られる自己が見る自己に他ならないことを知る。霊の内への還帰が外への現出であり、またその逆でもあって、ここでも先に欲動と意志において見られた内へと外へとの独特な動的構造が見て取られる。それは霊が霊として自らを知ること、あるいは霊が霊とな

ることである。

端的に言って、ここにはベーメの永遠なる霊（神的な霊）における自覚の構造が示されていると見ることができる。神的な意志は、その三一的展開を通じて霊として完結し、かつ働く。ベーメはこの事態を、「ここで父と子と霊はうちに互いに見合い、また見出し合う。そしてそれは、神の知恵あるいは観照と呼ばれる」(*Gra*. I -6)と言う。それは、神における永遠なる自己観照 (Beschaulichkeit seiner selber)[8]であり、それによってそこに生ずるのが、神の知恵(Weisheit)である。また神はそこに永遠なる喜悦(Lust)[9]を見出す。喜悦とは、神が自らこのような自己観照を享受し、そこで充足のうちにあることを示すものであろう。

しかしながら、こうした神の自己観照は単に静止的な状態ではなく、また単なる自己充足に留まるものでもない。それどころか、神的意志はうちに動性を孕むのであって、霊としてのその自己観照において「もろもろの力をもって自己自身と戯れ(spielen)、その力のうちで、神的な喜悦において自己を形成(Formungen)へと導き入れる」(*Grat*. I -14)。このような神的意志における新たな働き、さらなる発動が、いわゆる神の世界創造という事態に連なることは、すでに推測するに難くないであろう。もともとベーメにおいても、「神は無にして一切であり、しかも世界と全創造がそのうちに存する唯一なる意志である」(*Grat*. I -3)。この神的な意志のうちに、全創造は「その始源と根源態(Anfang und Urstand)」(*Grat*. I -14) をもつのである。

ここに今や、ベーメの意志-形而上学における意志的発現の第三の局面が開かれてくる。その発現が見られるいわば場面は、なお三一的な神のうちである。しかしそこには創造という新たな契機が現われてくる。神はここで始めて、世界という神ならざるものを産出し、そこへと顕現する。もっとも、ベーメにおいてここでの創造は、直ちにいわゆる被造的世界のそれではなく、さしあたってなお神のうちでの、いわばその原型（彼の言葉で言えば、天上的世界あるいは天使の世界）の創造、言うならば原-創造である。ではそれはいかに生ずるのか。この第三の局面における意志の動性についても、その内容を要点的に見ておこう。

先に見たように、意志であり霊でもある三一的な神は、その自己観照において永遠なる知恵を生み出すが、このことと結びついて、父・子・霊の三性は、全体として一つの力あるいは生命として見られ、そこから知恵の現われそのものが、この力の働きとして捉えられてくる。知恵を生み出すのは、もともと神が自らを把捉(fassen)し、観照

(beschauen) する働きによっているが、このことは言いかえれば、神が自らを知恵のうちで把捉することでもある。ベーメはこれを「自己自身の形像の把捉」(*Gat.* Ⅰ-16)と呼び、またその働きそのものを神の想像力(die göttliche Imagination)とも、また神の自己内形像化(die in sich selber Bildung)とも言い表わす(*Grat.* Ⅰ-16,17)。これらのうちに示されている形像あるいは像(Bildniß,Imago)は、本来的には神自身の像であるが、それはまさに神の無限なる可能性を現わす像であることにおいて、それらは万物の原像、すなわち創造の始源と根源態をなすものとも見られるのである。

この事態をもう一度、力の働きという観点から見直してみよう。無底的な意志（父）が自らを根底（子）へと把捉し、その両者が霊において一つの生命として自覚されるという関係を、ベーメは力という観点から次のように言い表わす。

「そこで無底的な意志は一つの根底へと、すなわち沸き立つ力へと自己を導き入れたのであった。力へと向かう意志は、この沸き立つ力を、力のうちから外へと吐き出す。その発出が神の霊と呼ばれ、それが第三の働きを、すなわち力における生命ないし躍動をなすのである」(*Grat.* Ⅰ-13)。

先に神的三一論において、父が子において自らの根底（中心または核心）をもつという、いわば存在論的な関係として見られたことが、ここでは改めて、父が子において自らの力を生む（顕わし出す）という力動的関係として捉え直される。力そのものの源泉は父の無底的意志であるが、それがまさに一つの力として顕現するのは、子においてである。父のimplicitな力は、子において始めてexplicitに力となる。しかもこの力は父の無限なる力に起源し、それを顕現するものであるゆえに、うちに一切の（無限なる）力を含んでいる。それゆえそれはexplicitには力(Kraft)でありつつ、implicitには諸力(Kräfte)である。子の力は、うちに一切の神的力を内含するのである。そしてこの力の観点から見られた父－子の関係は、さらに霊の発出によって外に顕わし出され、その関係そのものと諸力もまたexplicitに諸力として顕現する。この諸力の顕現が知恵にほかならない。その意味で、知恵はまた「吐き出された諸力(ausgehauchte Kräfte)」(*Grat.* Ⅰ-14)とも言われる。

以上のように、父-子-霊の関係は力という側面から見直され、それらの力の発現として、知恵というものが捉えられる。神のうちでは、とくに子が「知恵の力」(*Grat.* Ⅰ-12)、言いかえれば知恵を生み出す力として、いわば中心的な位置を占める。そしてこの力の働きが、先に述べた神の想像力、あるいは神における形像化ないし形成の働きに他

ならない。これらによって知恵のうちに生じる形像ないし像は、言うまでもなく、そこから被造的世界が生ずる、その万物の原像である。

ベーメにおける第三の局面は、このように「神の想像力」と「知恵の形成」が合わせ考えられるところで、創造の始源と根源態をなすものと見られる[10]。知恵はここで、万物の創造がそこからなされる母胎(Matrix)、あるいは原自然(Urnatur)というべき事態である。そこからの問題は、一口に言って、一と多の関係、または一からの多の成立という点である。神は、その三性の形成にもかかわらず、根本的には一なる神、唯一なる意志であり、知恵もまたそれ自体としては一であり、神の一を離れるものではない。とは言え上述のように、知恵が「吐き出された諸力」と見られ、それが万物の創造の根源と考えられる限りでは、そこに多の形成という側面が含まれていることも明らかである。ここに知恵の形成ということに結びついて、一から多への展開、あるいはベーメの言葉では、一なる力の（多への）分開ないし分開性(Scheidung, Schiedlichkeit)という事態が問題となってくる[11]。

とりあえず、この問題に関連してベーメがしばしば論及する事態を一つだけ挙げておくなら、それは伝統的キリスト教的な、神の子としての言葉(Wort)の理解である。先に、神における子は「知恵の力」とされたが、それはまた言葉としても捉えられる。言葉は、父なる神の語る、しかも神の無限なる力を含む一なる言葉であるが、その一なる言葉は、さらにそのうちから無限に多くのもの（力）を語り出す(aussprechen)ことができる。それゆえ「これらの諸力(Kräfte)は、すべて一つの力(Eine Kraft)に含まれるが、これが言葉の根源態(Urstand des Worts)である」(*Grat.* II-8) と言われる。そしてベーメはこの言葉のうちに、「神と自然の顕示の全根底」(ebd.)が含まれているとみなすのである。彼において、言葉は単なる譬喩にとどまらない、神的な知恵と力の発動の実在的な動性を顕わすものとして受け取られているように思われる。この言葉のさらなる展開の動性とそこからの多性の形成、つまり分開性の問題に関しても、独特な思弁が展開されているが、しかしすでに予定の紙数を超過したので、それらとそれに続く諸展開については稿を改めて論ずることにしたい。

おわりに

ベーメの意志-形而上学における、無底からの意志の発現、あるいは意志的なものの勢

位化のありようを、その四つの局面を想定して順次考察してきた。考察はなお途次にあり、第三の局面の半ばにして終わらざるを得なかった。ここでの知恵の形成として見られた創造の始源ないし根源態は、いわばなお神のうちの永遠の事態であって、非自然的、非被造的な「永遠の自然」であり、いわゆる被造的、自然的な世界、あるいは「時間的、始まりのある自然(die anfängliche, zeitliche Natur)」の成立は、とくに「堕落」という事態と結びついて、第四の局面としてさらに考察されねばならない。

しかしここで考察された範囲内で見ても、神的無限ないし無底から発する意志的なものの発現は、その霊としての自覚の構造を通じて、そこから必然的に世界創造にまで到る筋道を示している。ベーメにおいて、いわばTheogonieとKosmogonieとは必然的に結びつき、しかもその全体が、無底からの意志の発現という一つの動性によって貫かれている。そこに見られる意志ないし霊（精神）の動性は、なお素朴でbildhaftな把握ないし叙述にとどまっているが、しかしそのうちに、のちのドイツ哲学、例えばフィヒテ、シェリング、そしてヘーゲルらによってきわめて論理的かつ精緻に純化され展開される諸思想の、いわばその原初的な原型を見て取ることもあながち不可能ではないであろう。（未完）

註

(1) ベーメはすでに少年時代から、しばしば特異な心的体験や霊的幻視をもち、その後もかずかずの神秘体験をなしたが、とりわけ25歳のとき、いわば決定的な直視体験に遭遇したことは周知の通りである。ここで彼は「神的な光に捉えられ、(妙なる光に輝く）錫の容器にしばし見入るうちに、彼の煌めく魂の霊とともに、自然の最内奥の根底あるいは中心へと導き入れられた」とされ、それによって彼は「あらゆる存在の本質、根底と無底、さらには聖なる三重性の誕生、この世界および全被造物の由来と根源態とを、神の知恵を通じて見、かつ知った」と言われている。ベーメの根本直観はこのような神秘体験によって到達され、彼の独自な哲学的思想形成への基盤はここに確保されたと見ることができる。Cf.A.v.Frankenberg, *De vita et scriptis oder historischer Bericht von dem Leben und Schriften Jacob Böhmens*,11. Jacob Böhme, *Sämtliche Schriften*（以下、*Schriften* と略記）Bd. X,S.10f. J.Böhme, *Theosophische Send=Briefe* 12,8.*Schriften* Bd. IX,S. 44.

(2) ベーメの思想を「意志」によって特徴づける例は、古くはヴィンデルバントが、ベーメの「意志的根本見解(seine voluntaristische Grundauffassung)」(W.Windelband, *Die Geschichte der*

neueren Philosophie 1878,1922, Bd. I ,S.116)を強調した場合や、エーレルトの著作の表題『ヤーコブ・ベーメの意志的神秘主義』(W.Elert, *Die voluntaristische Mystik Jacob Böhmes* 1913)に見られ、その後にも、グルンスキーの論文名のなかに「ドイツ的意志の哲学」という表現が見られる(H.Grunsky, *Jacob Böhme als Schöpfer einer germanischen Philosophie des Willens* 1940)。

(3) J.Böhme, *Mysterium pansophicum, Schriften* Bd.Ⅳ.（以下、*Pans.* と略記し、本文中にその章と節のみを示す）。なお引用中の傍点は筆者による。以下も同じ。

(4)「欲動」と訳した〈Sucht〉という語は、もともと語源的にはsiech（英語ではsick), Seucheなどと同根のものと見られる。それらはいずれも、一種の病的な激しい昂揚、熱狂の状態を示す語である。ここから例えば、Sehnsucht, Eifersuchtなどの語が理解される。ベーメはこれを欲望の最も原初的な発動のあり方を表わすものとして用い、しかも欲求、求め(Suchen)という意味に結びつけてこれを解釈したのである。

(5) Geistは、ベーメの用語のなかでは「霊」と訳し、「精神」とはしなかった。その理由は、一口に言えば、「精神」ではあまりにも近代哲学的なニュアンスが強くなり過ぎるからである。しかし以下の考察に見られるように、ベーメが「霊」に関して展開した理解が、のちのドイツ哲学（とくにヘーゲルやシェリング）における「精神」の概念に連なる内容を含むことは明白であろう。

(6) J.Böhme, *De electione gratiae, oder Von der Gnaden-Wahl, Schriften* Bd. Ⅵ.（以下では、*Grat.*と略記し、本文中にその章と節を示す）。

(7) J.Böhme, *Sex puncta theosophica, Schriften* Bd. Ⅳ.（以下、*Sex punc.* と略記し、同じくその章と節を示す）。

(8) ベーメには、"Theoscopia oder die hochtheure Porte von göttlicher Beschaulichkeit"（著作 *Christosophia oder der Weg zu Christo* 所収）と題される小論考がある。Cf.*Schriften* Bd. Ⅳ.

(9) Lustという語は、ベーメにおいてさまざまな連関で使われ、広い意味で「喜び」を表わすが、いわゆる欲望に伴う快楽、享楽とは区別して、ここでは神の観照における静かな喜びとして、これを喜悦と訳してみた。

(10) このように考えれば、「神の想像力」と「知恵」とは、それぞれ神的創造における、いわば形相(Form)と質料(Materie)に相応するものと見ることもできよう。

(11) 分開、分開性については、*Grat.* Ⅰ, Ⅱ, Theoscopia などで詳論されている。

〔京都大学教授〕